梅美婦禰 二編 一

へ遠13
841
6

遠へ3
門
特841
巻 6

明治三六年
十月十八日
購求

春色梅美婦禰巻之六

梅園英對の拾遺

江戸　爲永春水著

第十一回

神社仏閣賑ひ榮の名所多き中に倒るも賑ふ未だ八幡宮音大士の霊場みて名高き美人の女客屋敷毫数で上まに客を招くよりき年増女も順ぐるふ絵ぬいの乃理老女ふ三年自慢の女ふも夫お長ふ利益ある老女の辯天おふの福と好ゆ八せ一　弁才天色の中店情の奥山樂ゑ花

境内へ筆に尽せぬ壮観なり 然るに西谷東谷傍つ
おのゝ茶見世の所 喜久家といふる門先みてるを行
合ふ三四人 行まる 洲俗の高遊と見ゆる風俗なりその
名を理兵衛名内うんどゝいふ人 茶へイヤ吉兵衛山谷の大
彩達 如何 ヤ〳〵 女殺連の好男子方 茶へうん とう殺
あい暑サ じやうどぜくませんゝ 実ふ如作 塩へ 種々異
乳サヨ 茶へトキニモ 四郎庵のおかるゝ 茶へ ナニサ見うら
富士 春育サ 如ハテ 行所へ 通行のお客

だよ 茶へうら 今一度山中 お所合ハ 如何 茶へ 山又山のお付
合うゝ 茶へハ〳〵 そんど山 焼ど 然ふば まづ お豆腐の上のう
サト 茶へ 久家の見世へ 這入う 茶へ 理兵衛さん見ハ
衆君達 行 入まゝと 茶を 沒中 綱手
蛍を運び 茶へ 挑灯をきる中 客ハ 行 ふ 掛ゝ
影の 提燈の 預主の 名をよく 又 額面 看ら
面白い 義自の 影 如来やしきま 云 花庵の 淳ぐ 物ぐ
大玄 居う 茶へ 行所へふ 物やしる 茶へ イ 吉花

菴と云作まれのハ新堀の北方で称じるもの客席で
おござりまする　蓑へ今然子何まても面白い句ござ　如へトキニ
理舟先生ハ山内の仙とも謂つべき仁でござります座
談なかまで実録の随落絶てすくなくなりますが何
分も不御存ござる不案内がな奥山へ目ふ這入込で
居振まおるなら揚弓場茶屋をもぢるらして瓦境
内の娘子どもハ門並随落させて人種を尽させ
やませアハハハハ　去りし左様女ふ気をもませるも罪な

菴へイヤ太きなる内院宣が出　理舟へ何とも挨拶に困る
如へモシ理舟先生みが心意気で一句うそやしやし　条へテヲ
何とも秀逸じや早く承りませうハハハハ　如へ御付や
ひとりも出来ね娘の子サアハハハ　何と秀逸でご承人
まませう　蓑へしんご晋子のもぢりござりませぬ　理舟へイヤ元ね
むかし徘有魔ハ凡と隠居とむかしふ言通り
何ぞ秀情師といふものハ世間へ作出とさせぬよふ深
情を催すものが極サ無雀すんぞ太鵬の如き

和らん奥山に隨落住する女　如へイヤハヤ大はる
言を申上るノウ然言へば仕方もまぐ言のがなつて
やはまぐ足下の乞情と申を　歳へ〳〵仕ぐろ言
風な言ふ〳〵ばのウ呼ん師でも頼まれあるこでも
あるぢぐ　彖へまぐ呼く東西〳〵　如へ須くも任生の
脂ろうと　歳へあるさの真ろう鮮鳥の　如へコサ〳〵
然いまぜろけ〳〵ちやう行く延　歳へ付候の訴へまア
止くみ早ちうみ毎人　如へ然ウ左程いろまぜ上仕

まぐ理兵衛ぶ　がさる矢場の振よ大焼場で生れの
宅へあけ込みとの人紀義底で住所を聞と知ぶ〳〵
矢霧ぶ寄と見さるものぐふ　歳へエ仕立　如へア、言て
岡義。ア〳〵　手敢で紙加減の今歳て摘ぶ様を接様を
あて本宅を出さる教導ひそ〳〵　歳へモシ〳〵　如言
墓の半途ぐ彼女の宅へ近寄よ行やーこゼト
真顔ぶ多りてい人　如へ大方見世を仕舞て帰ぶ
を送り様ぐ〳〵ふ　歳へやうまーへ　沈深や

門口連中ハ大周ぜ 女房へ 理喜さん大分徘徊
祝言ハ来歳ましたねえト其処へ 紫采店より 行近き
名代の手前 蕎麦亀 玉屋から十六七のうちゆへすき
娘出来り 理喜家に向ひ 標を屈み 鼻紙を含く
娘へ 理喜さん お帰りに出 ちと お寄 なさいまし 理喜「ヨイ
お亀機嫌 今に往ヨ 娘へ 仲言 ちやア 居でござりまし
ヨト言捨て あどけなく 大切して ゆく 跡見て 理喜
象へ 戻らしく 其遣に 向ひ 嘆息 しく

理喜「へヽあの通り論より證拠十月の見る所十指の指さす所 好男の本家本元へ来まで御座ンや 理喜「あまり
倦まさ 拝らせ 足へ灸でも すへませ ト云ひつゝ 理喜
象潟を大路にて いざや 拝び しづ 衣や 黄昏の 景色と
うまぶ 衆人 茶店を 立出て 随神門より 馬築を
北の方へと 歩行けり 往来ハ 群集の 宮士 指 堀内ハ
なかけき 猿寺の 長家に 彼の 一人住 ころ〳〵 酒浸て
も浪人の不自由 多き 判 絵府より 此所へ 引

半二良

判二郎が
さるでら
猿寺の仮
住居

強うして　什糸ぶ　高姪と　情の　実仏よ　強して　見疲ぐ
夏　苦労さぞう　心を　痛めるうんと　男ど　當付
仏りも　任せぬ　身うまバ　諸方ゐく　情の　合力せ　蒸
暑くハせど　粉々　乳を　付て　傍ま　元ろ　小巻も　詰
て　費を　厭ん　ゐ　さびぐ　金盛　什糸ぶ　ま　番よ　ゐ　ま
ひのぶざるわど　帯後を　さろて　安坊ません　ぬげ　ゐて
衣類　ぬバ　さづう　うぬ　ぬた　ろて　実よ　ゐ　ぶんの
ろ文　うと　他人も　美ぶ　心　衣裳の　好ま　常ま　ぬ

月ゆ　ま　ば　月　枝と　好　風ま　ろ　身の　ら　ら人　元来　女ま　好
風信　を　死ぐ　ろて　辺　沢　ま　も　姉　姉ま　る　年　増　女　ま　蒸
振も　ま　き　粉　ま　ば　粉　湯の　帰ま　た　蒸　紀の　ま　類　ゐ　ま
接　投　ま　ろ　て　ゐ　ま　ま　ま　易ぐ　ま　振　ま　情　ま　列
深も　早ま　ま　ぬ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　判　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

遠慮ど今のうち気を付るひと開るのなんのと他人のもの
悪〳〵おこゝで自分ハなんざれく先刻矢天山の
手紙をうけとるなんぞハ家早昆布門さまへお百
度をあげて帰りた百親まるさまの地内で久アしく
拝んで来うんどゝ判〳〵ナンノ一切ぐろう世間無に死
たこゝ所て手紙ゝ自慢をきるものがひるものゝ様子
今朝のお百度ハ彼情人のわるハ百度来りをしるのご
うらのも賞うまる程の切死でもうひとチ〳〵ヨヤ煩ち

おこるの手紙をうけて昆布門さまへ来るものゝわく
毎人ぐ判〳〵此言を言ません拝よ情人と何ぬ来ろ
てもゆうま〳〵言ましかるひ拝よそして何卒富のれを
拾ひてそまぐ実ひふ生まして三百ぬ当ろてそまで
二個ぐ十ろ実彼を見ますと拝ろと頼ひこのごらう
〳〵ナニ手紙る彷こをに頼掛のするもの
ろまを茶さんしやう何ろまトいるわしも落衣を
抱て風呂ろう帰り来る狼表ひろう〳〵何ぐこ

ものうらう丈夫宣敏として▲ヲヤ今陽よおれのう
まいるるれいうう眼鏡ハ何ざる丈じやア今ハ
記らまるひ苦ざ悔くしの・ヲヤ〳〵うゑ〳〵他人よう
先へ記して思ひて手紙をおうるうをお言でるひ一年中
ものこの寮坊の癖ホト言るぐう判所寄の鳥を見て・判
さん使りが知るまること久▲ヲヤ淫の使りがへ▲アレサ
廊ふサ▲ぞうく和やア まさおなさんのおとうと
思ひて悔ーうくハ・ヲヤ〳〵んざ他候なざまへ

▲ヲヤ〳〵丈ざうてるも衆女が山形よ判さんを義弟
ぐうて上るのホ情人るもうるひでハ弟まる廣
耕地のおなさんうんぞホ情人ハるるまちやアうるくよ
合るひいなけ糸さしハ実正の内義さんも同組
だ〳〵詮方ざるひが他の女と情通を仕成ざと合
点ーるるハョ〳〵希とうふ神とりよのくト人まも
又一個の郷番〳〵判さん今ハハ私の所へ来く
内銀を上るる美味ものがひうう・ヲヤ〳〵私の処

でまた今わかい判さんの好る編つけの豆腐を
毎人ぶらくらくさらあ茶のお好をもげくらくて今
私ら湯ゆ浮ゆうげよ寄さのごアみ
菓子を焚て判さんとお好べでい判さんが今俳諧の
坊さんの松ごみ工 ハヤ私も判さんもお菓の山搭ご
好ごう毎人ぶつまぎ〳〵焚さのごゆ今俳諧さん
ごと居るとこをあ言でゆハョ今月八お富さまごゆ
猛記のつるこへ

第十二回

姦と漢こんの人どもうら考き。女同士八自共言葉に
花も見数もあまこ八さ子ごお嬢一人お智八
人のこと人おわらで判、名弟の撹居を同
ゆ久お寄集
ゆう妙廊もの達今月もうふび程八お雨の夜
月の体まづこそ優を居ゑ毛似〳〵各袁様
ごとも真のうゆの世ゆ見相いづきも劣らん姉の中お
お園とりの菓店の娘まご年齢十六七最盛年風

俗にいふ判物の側にめづらしき中本をもちゐたり
判ぶん代本は面白そうなるもそなはりたれど
草稿らしくへがき本のごとくにて繪も出入てあるゆ
えに版元はめづらしき故淡路にて板行ハ出来ぬべき
ものゆゑ著作ハ淡路の人にて淡路にて
文と口画ハ浪花人情本の特色にて梅
暦と春告鳥なぞ曙記文句ハ淡路にて
ハヤ好題号ゆゑ春をとめ雛祭。そゝ代作者の名
例の人くとめ。遠ゆ極ゆゑ。判ぶん此ハ狂歌合
判へ然ものさとびふ人情本通ゆ狂演ゆの
らるゆ狂歌合ハ永春曉作。そこにハ狂訓とりく
作者の連衆ゆ。判ぶん判へ
連中ハ中ゆ師匠ゆ世話ものゆ差別ゆ山谷堀の若ケ
おけ繁くさんの校合ゆ徳下ゆ沢山ありて春水の著

作と所とうう お淑賀さんの草稿の方がおもしろひと
りへうすゞョ まく〳〵そまで中本の中ふ為永清賀女と
名が出てあるのうまへト言葉の源氏
漢ゝ。美艶仙女香。初ゝぶう。ホン二仙女香の白粉と
製造の業を買て賣ひへさ
ふて漢也の人ゝ 俄ふと散ると乃るふ為ふ
けう花のあらを」と古人も今の世も意の如く変うなく
ふふ思ひ思ひれて作ようきもあれ世ものれば悲しふ

辛苦を凌ぎ行末とげて睦まじく楽む夫婦も稀にあるは
凡恋路の中くふ忘れ難き宮の底意も知れ恨も深く
且て親母〳〵きの限り為ける仕合ろうき縁と縁ハあく
まで変もい情き所ふも嫁へて恨と同志供も供まもせぬ
如ふて親の会義沙や世間の義理ふ妨らまて手限ふ離
別〳〵浮名の立難ひハ養ふ悔しき意ふ〳〵月ふ材ふム
花ふ風春〳〵ふいへど変て行 繁月歌の新雪き路を踏び
或ふの門を窺ふ艶男戸口ふ寄て行ハ人やくもたれと

あ梅はな者
はり入る
陸子小
バニヤ
玉枝

知りうる銀金の落ちよう寄人れも表の男も来しそう
表をひらいて戸ふ口寄　清へ　お夏う　ハイ　清さんえ
お待ちよト　いつて戸を明ぬ迄ハ嫁女姿の一個の服装ハ
二八を重ねくハ就ど寒さの侵いきびけ　花の色ど世
月の肩　雪の貴ハ白彩もおぼぬ色の毛皮の人逢ハ
世の笑　四ハあれど今宵ハ憂れきづみてや　涙の眼元
霧けき　往ふ袖ハきく人表れふとも思ふれ思ひ　男も
涙ぐる　清へ　お孫ら〜へ　実ふ頃月ハ高う〜ろ〜ぜト四辺を

見ま〜　清へ　お人ハ　ハ〜ハ　三ふ今夜ア裏の奥の家へ通ふ
往て酒を呑ふ〜て寝て居ること　いへうう　紀ハ　ハ〜ョ　雪
戸を閉て謎をうけて　雪なトもれよう　家のよふ　体ふ
ハ〜ア　仏ふう　出ちへう　横〜と　相撲　仕度ふ　酒ハて
うう　高よ　ハ〜ふ　ハ〜ョ　清へ　左様　言ハ　宜て　寒と　悔ふ
復の　ふて　ふの　ぶふ〜と　ハ〜ふ　仕ふ　ハ〜ふ　ハ〜ふ　ふ
変れ　ふハ　ハ〜ふて　居ふ　ふ　ハ〜ふ　ハ〜ふ　ハ〜ふ　ハ〜ふ
出ふ　ふも　左様　言ふう　ハ〜ふ　浅ハ　ハ〜ふ　ハ〜ふ　ハ〜ふ　ハ〜ふ

皇ふして続けつつ吐くも男の霧れざるを脱が
えてぬめる人をそれざけまども赤縞らしくおのふまるも
外ぞ悪ひとて寄りて涙しつぶ仏の中にやう仏ばかりを
仏でもお茶の行状と見合て寛容を仕様と思ひて
物をさとりて居ることを左様ふ事ア私やアそのふ
ものも知らるヨ私やアこそ出るお前が私の所へ借く
れと金をくさまの一件で毎人と言葉つてお帰りぶり
夫で復ふ言てお知てゐるのごとだろう思うて居られども
諦う久しくおとりあひをそれみ毎人ぶ
是非他人の勇者みるまでつくつ左様ふちやアお茶の
顔も不立私も今まで席動だらでで通しつのが何も
毎人の禁花をまるつあよ余計の欲をつき変もるひ
つ縁よ依つてぶおあと相談して死んでも仕まつふ
つ男ヨト涙を落して男の孫よさぶつ清ヲヤ
ちんぶ言を言ノウ手紙よ密男死んでるるめつ何も
死ねばのるるもねへ入る へイエそれざるよ先達中

ゝ須水之用ゝゝ母人ハ深して医師さぬハ看て
業ハ川ゝゝ狂身ハ遠ひゝゝと言ゝゝゝ子ハ病しても
年ゝ乳で家内ハやア居ゝ是ヨナニ母人ゝハいハものく
ゝ二だゝゝの金で爺のゝゝ畑 放きて十二の節ゝゝ今の
母人のゝハ笑ゝゝさのごけまども家早今まで深山
活業で亜ゝゝ今私ゞ家を出ても暮ようけられる
ゝハゝいョ爺ゞ死ぞハ居ゝと今まで此家ハ居やア
ゝゝゝハ清へ ゝれゞゝも親といハ名ゞゝゝゝ是

ゝも此方ゞハ分て家ゝを ゝゝけまゞゝゝ
ゝ湯 お茶ゞ出しゝゝけゞ幼児節ハ別まゝと
ゝ姉さんの ゝ家ハいまゞハ此ゝも ゝゝの所ゞ知れゝ
ゝゝ イエ ゝハ関ゝゝゝゝその姉さんを貰ゝと
人ゞ国食 引込で浸ハ ゝく任合ゝ雪ゝゝて姉さん
ゝハ女帝ゝハ ゝゝゝ私ゞ種ゝゝ人に ゝんで
関合ゝて貰ゝゝゝゝモウ ゝ女帝屋ゝハ居ゝゝく今
ゞやア ゝく身ゝ活ゝれて行ゝと言ゝゝゝゝ私の

方あんまりなんヨ　清「ハテナ　困るノウお姉さん身も親
身の縁のある人がなんうまさうの時よ私細くなって行
ねへ復讐うの兄弟が在のごけれども私ん人が
不埋屋を変を言さので竹ノ内まで目差ものふるつて
成長なつても音信不通ごろう行るひのヤ」ヨやく
お姉さんも兄さんう姉さんがあるのへ新やナたでめく
閑さヨ　清へ左様ごさらう まるまるで誰ても出しさるのごなひ
うう夫ごけれども竹ノ内の八現在立流な家の旦那が
実の兄さんごうけが今ごやナ根岸の方へ若旦那をして
住まうことのふうう尋ても変様へ八なるまひヨ「それい
左様と清さんお兼ヨナ性根をきえて一ツ思案をしく
お呉な新やナ新して居うのが あるごーを出でるうるひ
よト思ひ切つてる顔を色ゆて親ふ出ふねごー怖さ身ふへ八
仏の底も推量うまて不便猛烈男の性清へ手紙ごー
覚悟を極て出立地を放まもうるうう「ア金一も二
個が流まごへ命でも死んてお呉なト言く涙を

さらさら男も驚くぎ 淫婦間世 清「そもそもどもまでは
見よのう 「ア」 嵐雲 そんぢと思ひて出来ると我うぐ
和を稲もりて意ふ墨ふる 絵の園 伶 ふる鼻ちら
雷や ふ別うる芸人 園志 きびまる安人のうちひける

狂訓亭門入

爲永春曉著

出園へ判次郎の傍ふて右ふ ちらせ 人情本の まるこ
浪ふ 修業 茶屋 美中の 稲ふ ふうし引 竹家ふ 集へし

浪達へ 見べ 見して 出園を 出ぬき 流女とそ く 立
帰り 亜迦ふ もる 戯 まる まる 見 探べの 考例 ふへ
新 も 和ふ べ 彼 出園へ 本 綾 絡 て 眼 ふ 涙 の 八 引
三 く く 人 人 そ ま ご ま へ ヲ ヤ 和 を 亜 迦 ふ て 流 女 帰 ま の 人
惰 ふ ー ひ ま へ 判 八 ニ 只 今 帰 ま る 探 ふ 茶 を 亜 迦 ふ て
帰 り ま の ご ま 八 ヤ 然 久 ト 言 ま ぐ ぐ 涙 の 目 元 ま の 保 ふ
笑 顔 を ま て 門 ほ を 出 ま る 将 し も 山 糸 の 内 寝 ま の 用 せ
頼 ま れ て 世 所 ふ 入 第 ま る 辰 巳 の 米 八 丁 度 ふ 園 と 揚 合

けり

此度まゝ奏行たる〜の續ぶのやちの新題句を
和ぶんとるぶ第二編をよゝしうあらんと

爲永連

イヨノウスシマ 春英
尾州一ノ宮 春蝶 校
同 ナゴヤ 春鶯
東都飯台下 春江 合

春色梅美婦祢巻之六了